

## 第39回福岡実践人研修会報告

「より良い人生の生き方セミナー」

文 小川 直人

十一月七日(土)、福岡市博多区博多駅東のホテルクリオコート博多で、百二十五名の参加を得て開催されました。講演に先立って一分間の立腰・瞑目を行い、続いて森信三先生の人生と業績を紹介するDVDを視聴しました。講師お二人の感動と奮起を促す講演のあと、森先生の三男の実践人の家常務理事・森迪彦氏が「実践人の家ができて四十年。ペスタロッチ教育賞の受賞、八巻セットの続・全集や哲学三部作の刊行など、時勢が変わってきました」と最近の再評価の動きを報告され、その後の懇親会では、参加者が次々に自らの実践活動や感想を発表し、会場を盛り上げました。以下、講演内容の概要を紹介します。

### 講演①「博多ごりよんさん細腕繁盛記」

福岡商工会議所副会頭 西川ともゑ 氏

西川さんは福岡市の博多で育ち、平成四十四年(一九九九年)に津田塾大学英文学科卒業後、小学生のときからの同級生だった大正十五年(一九二六年)創業の老舗料亭「博多石焼 大阪屋」の三男と結婚。十年間は専業主婦として夫や子供たちのためにさちんとした家庭料理を作ることやPTA活動などで自分を磨き、その後、女将修業のかたわらNHKラジオのインタビュアーとしても活躍。三十年以上も名物女将として、福岡市の著名人と交流してきた。

平成四年(一九九二年)、「博多ごりよんさん・女性の会(ごりよんさん)」は商家の奥さんに対する敬称)を立ち上げ、女性の視点から博多の文化や歴史についての勉強、地域の魅力を発掘し、育てる活動に積極的に取り組んでいる。

繁華街・中洲を流れる那珂川河畔に花を植える活

動からスタートし、古い町屋の保存、地域の祭りの復活、さらにはがめ煮・博多雑煮・豚汁とおむすびなど伝統料理やおふくろの味を伝える小学生向けの料理教室など多彩だ。

平成二十年(二〇〇八年)に大阪屋代表取締役になり、現在は会長。「行動する女性会」をモットーとする福岡商工会議所(福商)女性会のリーダーを務め、平成二十六年十一月から百四十年以上の歴史を持つ福商初の女性副会頭に就任。市民レベルの国際交流などにも活動の幅を広げている。

講演ではこうした活動を紹介したうえで、「安心して子供を産み、育てられる、女性が輝く社会づくりに貢献していきたい。子育て、孫育ての喜びは女性の特権。少子化を心配する声が高まっていますが、里子や特別養子縁組などの制度を充実、活用して子供が元気に育つことのできる社会を作っていきたい」と元氣よく語りかけた。



講師：西川 ともゑ 様



## 講演②「船場商法」

絵手紙作家・大阪ホーム社長 青山隆之氏

トイレットペーパーやティッシュ、タオルペーパーなど家庭紙の卸・販売事業の傍ら、趣味で始めた絵手紙(はがき)はいまやカレンダーとして商品化され、インターネット上の通販サイトで販売されるほど。その日に感動したことや、仕事などで出会った多くの人たちへの感謝の気持ちを込めて、一日二枚のペースで描き続けている。手描きの絵に短い言葉を添えて、自分の気持ちや伝えたいことを表現した絵手紙で、福岡実践人の創始者・帆足行敏氏とは十五年間、絵手紙での文通を続けており、その縁で講師に招かれた。

青山さんが生まれ育ったのは「川柳の町」として知られる岡山県久米南町下弓削。小学校の卒業証書には「どぶ水を 平気で泳ぐ 雨がえる」とやんちゃな青山さんの特徴をとらえた先生の句が添えられており、川柳の五・七・五のリズムが口をつくようになった。これが絵手紙の発想につながったという。高校を出て大阪・船場の老舗洋紙店に丁稚奉公。

船場商人の心構えを叩き込まれ、大事なことは「信義(約束)を守る」と知った。昭和四十年(一九六六年)、二十六歳で独立。五年後の大阪万博に世界百九十八か国が参加することを知り、外国語を学ぶ女子学生を通訳に雇って全パビリオンの館長に会い、館内のトイレットペーパーの納品契約に成功。閉館後の午後十一時に毎日トラック五台で運び込み、翌朝四時までに全部取り換える作業で半年間、万博会場に通った。

「ひらめいたら、すぐ実行する」のが経営モットーで、スーパーやコンビニでは売っていない高品質のトイレットペーパーを箱詰め三千六百円で宅配するアイデア商法で大当たり。全国に特約販売店網ができたという。

関西経営の神様と言われる吉本晴彦氏の眼鏡にかかない、政財界や芸能界にも広い交遊ができた。特に司会・タレント・映画解説者の浜村純さんとはラジオ番組を通して交流が深まり、「言葉は人格の

表現、言葉(ことだま)。相手がわかるように、わかりやすくユーモアを入れて「相手の気持ち、心を思いやらない人は人脈がでない」「泥棒も警官も走る方向は同じ。何が違うか。思いが違う。思いの質が大切だ」など数々の浜村語録も紹介。

講演は笑いに包まれ、参加者から質問が相次いだ。が、「今七十七歳、朝は四時に起き、五時半に家を出て七時には会社に着き、会社の周りのたばこかすやごみを一時間ほど掃除します。十二時間働くのが日課。いつ辞めるか決めていません」。また、「当たって砕ける、ひらめいたら即実行。ダメならダメで考え直す」「万博の仕事で通訳してくれた子(女子学生)たちは今ははがきで交際している。手紙が来たらすぐ返事を書くこと。その日に書いたら金メダル、二日がかりなら銀メダル、三日なら銅メダルと決めて書くのが楽しくなる。とにかくはがきはぜひ書いて」と商いや人付き合いのコツを軽妙に語った。

最後に往年の人気歌手・田端義夫さんとの交遊秘話と「かえり船」などヒット曲の前奏に合わせ、司会が語る長い前セリフをプロ顔負けの名調子で披露し、会場を沸かせた。



講師：青山 隆之 様





平成27年11月7日  
於：ホテルクイオコート博多



平成27年11月7日 (上)  
於：ホテルクイオコート博多

# わか読書会

27・11・12

## 第一部 第2講

### 「人間と生まれて」

なぜ人間として生まれたのか？なぜこの世に生を受けたのか？私も四十代となり意識するようになりました。

この章の云うように、この世に生まれたことですら奇跡であり、それが霊長類の長である人間で生まれるのは何らかの意図を感じざるを得ない。

私は未だその答えは出ておりませんが、森先生の尊敬される吉田松陰先生の言葉に「学とは人たる所以を学ぶなり」とあります。

覚とは、書を学ぶことも勿論ですが、人から学ぶ、自然から学ぶ。全て人生で出会った人や事柄から学ぶことにより、答えが出るような感じがします。

生きていくのは周りに迷惑や恩恵を頂いている。

恩返しや奉仕をして返したいという言葉聞いて私も行かされていることを知りました。

一つの虫でさえ、人間が作ることをさえ出来ない。その虫よりも優れた人間を作ることこそすごいことである。人間であることを感謝したい。 藤岡 啓介



森 信三 先生

